International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

Extended essay cover

Candidates must complete this page and then give this cover and their final version of the extended essay to their supervisor.

Candidate session number	
Candidate name	
School name	

Examination session (May or November)	May	Year	2015

Diploma Programme subject in which this extended essay is registered: Japanese Group 1

(For an extended essay in the area of languages, state the language and whether it is group 1 or group 2.)

Title of the extended essay: 言葉とは何か
登場人物達それぞれの言葉に対する考え方や取り組み方から解き明かされた言葉とは何か。

Candidate's declaration

This declaration must be signed by the candidate; otherwise a mark of zero will be issued.

The extended essay I am submitting is my own work (apart from guidance allowed by the International Baccalaureate).

I have acknowledged each use of the words, graphics or ideas of another person, whether written, oral or visual.

I am aware that the word limit for all extended essays is 4000 words and that examiners are not required to read beyond this limit.

This is the final version of my extended essay.

Candidate's signature: _____ Date: 1/1/2015

Supervisor's report and declaration

The supervisor must complete this report, sign the declaration and then give the final version of the extended essay, with this cover attached, to the Diploma Programme coordinator.

Name of supervisor (CAPITAL letters)

Please comment, as appropriate, on the candidate's performance, the context in which the candidate undertook the research for the extended essay, any difficulties encountered and how these were overcome (see page 13 of the extended essay guide). The concluding interview (viva voce) may provide useful information. These comments can help the examiner award a level for criterion K (holistic judgment). Do not comment on any adverse personal circumstances that may have affected the candidate. If the amount of time spent with the candidate was zero, you must explain this, in particular how it was then possible to authenticate the essay as the candidate's own work. You may attach an additional sheet if there is insufficient space here.

牧は、このEEを丁寧に深く分析しながら書きあげました。アドバイスを忠実に取り入れ、自分なりの考察を固めていきました。期日にも遅れることなく、少しずつ確実に書き上げていった過程は、見ていて大変気持ちがよかったです。
『舟を編む』についてEEを書きたいと相談に来た時、まず始めに、この作品の作者は、何を伝えたかったのか、考えてほしいと課題を投げかけました。数日語、牧は、最終的に言葉とは何かということを読み手に知ってほしかったのであろうという答えを持ってきました。個人個人により、当然、作者の訴えていることへの捉え方は、変わってきますが、牧のこの作品への解釈も大変面白いものだと感じました。そして、次にどこからどのように分析していけば、その答えは出てくるのでしょうと尋ねたところ、それぞれの登場人物の言葉に対する姿勢を分析し、言葉は、何かという答えを導いてきました。ここまで、話しを進めていくのに、３週間ほどかかりましたが、後は、驚くほど早く進んでいきました。
彼なりの明確な答えを持って、このEEを完成することが出来ました。彼自身、小説を書くことにも興味があり、それ故、今回のEEは、彼にとっても言葉について考える絶好の機会になったと思います。

This declaration must be signed by the supervisor; otherwise a mark of zero will be issued.

I have read the final version of the extended essay that will be submitted to the examiner.

To the best of my knowledge, the extended essay is the authentic work of the candidate.

As per the section entitled "Responsibilities of the Supervisor" in the EE guide, the recommended number of hours spent with candidates is between 3 and 5 hours. Schools will be contacted when the number of hours is left blank, or where O hours are stated and there lacks an explanation. Schools will also be contacted in the event that number of hours spent is significantly excessive compared to the recommendation.

I spent 4 hours with the candidate discussing the progress of the extended essay.

Supervisor's signature:

Date: Feb. 23rd 2015

Assessment form (for examiner use only)

Candidate session number	

Criteria	Achievement level: Examiner 1	maximum	Examiner 2	maximum	Examiner 3
A research question	1	2		2	
B introduction	1	2		2	
C investigation	3	4		4	
D knowledge and understanding	3	4		4	
E reasoned argument	3	4		4	
F analysis and evaluation	3	4		4	
G use of subject language	3	4		4	
H conclusion	2	2		2	
I formal presentation	3	4		4	
J abstract	1	2		2	
K holistic judgment	3	4		4	
Total out of 36	26				

Name of examiner 1: (CAPITAL letters) _____ Examiner number: _____

Name of examiner 2: (CAPITAL letters) _____ Examiner number: _____

Name of examiner 3: (CAPITAL letters) _____ Examiner number: _____

IB Assessment Centre use only: B: _____

IB Assessment Centre use only: A: _____

言葉とは何か？

三浦しをん作『舟を編む』：登場人物達それぞれの言葉に対する
考え方や取り組み方から解き明かされた言葉とは何か。

Abstract

この論説文では、小説の題名である『舟を編む』とはどういう意味なのか、そして登場人物達が作ろうとしている辞書とは、そもそもどういうものなのかを追求しながら、最終的には登場人物達のそれぞれの言葉に対する考え方や取り組み方はどのようなものなのかを分析し、究極的に言葉とは何であるかを追究した。一人目の主人公である馬締は、「言葉」に対して感じたあらゆる特徴を知り、言葉の必要性と存在理由を理解する。加えて、彼は言葉の柔軟性にも気づく。二人目は主人公と対比される西岡である。彼は言葉や辞書に対して一般的な視点を持ち、その視点から辞書や言葉にある価値を学ぶ。三人目は主人公を成長させる岸辺である。彼女も若い世代として新たな視点を辞書に注ぎ、言葉が持つ力に気づき、言葉の扱い方の重要性を知る。そして、辞書のために生きてきたような人物である荒木と松本たちを通して、言葉や辞書とは何かを考え、日本の辞書の特性を伝える。最後に、言葉の成り立ちを考えながら、これらの登場人物が得た「言葉とは何か」という答えについての考えや、辞書や言葉の存在理由について考慮していくと、言葉とは、永久に存在しうるものであり、人間のアイデンティティであることが解ってきた。

(515字)

Contents

Abstract 1

Contents 2

序論 3

本論 3・7

馬締 3

西岡 4

岸辺 5

荒木と松本 6

結論 7・8

参考文献 9

序論

三浦しをんによる小説『舟を編む』は、本の中に出てくる出版社の玄武書房辞書編集部が「大渡海」という中型国語辞典を創るために様々な登場人物が四苦八苦する物語である。本書は一冊の辞書を作る難しさを伝えると同時に辞書を作る意味と言葉の存在理由について登場人物を通して言及している。辞書を創る過程には、登場人物一人ひとりのドラマがあり、それぞれは様々な想いを「言葉」に抱いている。多くの人々にとって、辞書とは広辞苑第二版に定義されているように、ことばを集め、一定の順序に並べ、その読み方・意義・語源・用例・などを解説した書のことである。言葉の意味を調べるためには、電子辞書やインターネットなどといった辞書より優れた「言葉」の検索方法が最近では普及している。しかし、著者によれば、辞書とは舟であり、ひとはその舟に乗って、暗い海面に浮かびあがる小さな光であるもっともふさわしい言葉を集めて、正確に、思いをだれかに届けるためにあるものだと登場人物である荒木を通して伝えている。だから、辞書編集部の登場人物達が作ろうとしている辞書の名前は広大な海を渡る船を創るという意味で、「大渡海」であり、本の作品名は『舟を編む』なのだろう。つまり、本である辞書と電子辞書は根本的に使用理由が違うのである。なぜなら、電子辞書というものが言葉の意味を調べるためにあるのだとすれば、辞書は適切な「言葉」を探し出すためにあるものだからだ。本書は、様々な視点から「言葉」というものを捉え、写し出している故、読み手である我々に「言葉」というものを改めて考える機会を与えてくれる大きな役割を果たしている。この論説文では、５人の重要な登場人物の言葉に対する考え方や取り組み方は、どのようなものであるか問い正しながら、言葉とは何であるかを言及していく。

本論

馬締光也

馬締光也はこの本の主人公であり、辞書編集部で中型国語辞典「大渡海」を創っていく中心人物となっていく姿が物語を通してうかがえる。彼は几帳面であり、その真面目さを編集部長の荒木に買われて第一営業部から異動となった。また、彼が持つ「語義を紡ぎだしていく力」を見抜いたのも荒木である。「語義を紡ぎだす力」とは、たとえば、本書で述べられているように、「しま」と言われて、「島」とだけ思いつくだけでなく、「まわりを水に囲まれた陸地」、「ヤクザの縄張り」、「まわりから区別された土地」などと思いつく力である。これは、辞書を創る上で重要である。なぜなら、辞書という広くて深い海から適切なものを選択できることが大事であるからだ。しかし、自身で「考えることはいくらでもできますが、なにを考えたのかをひとに説明するのがうまくない」と言っているように、彼は人とコミュニケーションを取るのが下手である（P.034 ℓ15）。そのため、「全員で考え、工夫し、作業を分担する必要がある」辞書編集部で上手にやっていける自信が最初の頃は無

かった（P.034 ℓ12）。それゆえ、辞書編集部員の西岡に頼る場面が多い。そんな頼りないような男であるが、言葉や辞書への執着心が強く、「自分の世界に夢中になるタイプ」の人間である（P.100 ℓ2）。そのため、物語を通して彼が辞書に奮闘する様が目に見えるかのように伝わってくる。その熱心な心は馬締自身を成長させるだけでなく、周りの人々にも影響を与えた。最終的に、馬締は辞書編集部の主任にまでなり、「大渡海」を創り上げる。しかし、馬締はたいそう辞書に夢中になっているのか、馬締の視点からも他の登場人物の視点からも、明確に馬締自身が何を言葉に想っているのかは最後になるまではっきりとしない。馬締の妻である香具矢は「馬締が言うには、記憶とは言葉」であると言うが、これは飽くまで香具矢が辞書没頭する馬締を見て気づかされたことであるため、香具矢の言葉に対する想いであろう（P.212 ℓ16）。馬締の言葉に対する想いは、「大渡海」の完成祝賀パーティーで述べられる。松本先生が死ぬ前に辞書を創り上げることが出来なくて悔しい馬締は「言葉はときとして無力」だと感じた（P.257 ℓ17）。なぜなら、どんな言葉で誰が呼びかけようとも命を繋ぎ止めてはおけないからだ。確かに、言葉はあくまで、言語でしかなく、ものごとを伝える程度が精一杯である。どれだけ想いや感情が言葉に含まれるからと言って言葉は物理的に何も出来ない。しかし、彼は同時に言葉とは証だと思った。それは、物理的な死を超えても、先生が生きていたという思い出を語り合い、伝えていくためには絶対に言葉が必要だからだ。馬締は思う、「死者とつながり、まだ生まれ来ぬものたちとつながるために、ひとは言葉を生み出した」と（P.258 ℓ10）。これは、馬締が言葉とは生きた証明を人々の心、書物、歴史に刻みこむために必要不可欠であるということをものがたっているのだろう。加えて、馬締が香具矢に恋文であるラブレターを書いたときの馬締の心情も興味深い。なぜなら、このとき彼は不器用なため、上手く彼が思う気持ちを表現することが出来ないでいた。だから、手紙という形で心情を告白すると決めた。「わからないといって立ちすくんだままでは、何も変わらない」注といっているように、彼は「心を形にするために」注文字をひたすら綴った。結果、漢文みたいな、西岡に笑われるような個性的な長い恋文になった。しかし、それはその時の馬締らしいものであり、彼自身そのものの気持ちを表している。そういう意味で、言葉とは奥深いものである。それは、辞書を使って適切な言葉を探し、思いを明確に伝えることも出来れば、一方で人は一生懸命言葉を並べることでも形がある想いを伝えることが出来るからだ。

西岡正志

西岡正志は主人公である馬締より前から辞書編集部にいる先輩である。また、彼は馬締を影から支える辞書編集部員でもあるが、「大渡海」の企画を続行させるために、会社の「上の人間」により、宣伝広告部に異動させられる。彼も馬締に影響された一人であり、当初は辞書作りに対して何の特別な想いを抱いていなかったが、「大渡海」と関わることで言葉の重要さを知る。西岡自身も「辞書にはなんの興味

想いれもなかったが…仕事だと割り切ってがんばった」と言っているように、彼にとって辞書とは商品で、際限のない言葉を扱う「真実の意味での“完成”を迎えることがない書物」であった（P.101 ℓ16, P.104 ℓ4）。ゆえに、辞書に踏ん切りをつけることが出来ないであろう馬締を見守って、辞書を商品にしていくことが自分の役目だと信じた。そして、西岡はそのために辞書の品質を保証するネームバリューのために、土下座をしようとした。しかし、この時の西岡は以前の西岡ではなくなっていたため、土下座をためらったのである。なぜなら、皆の努力の結晶である「大渡海」を「商品」という言葉だけで片付けられなかったからだ。馬締が来る前の西岡ならば、土下座を厭わなかっただろうが、馬締からの影響によって西岡は変わることが出来たのである。元々、西岡は馬締の正反対の性格、考え、価値観を持つ人物として登場してくる。この馬締と西岡という正反対の人物の対比は物語をおもしろくさせるだけでなく、言葉や辞書と言った本書にあるテーマを様々な視点から見ることが出来る。また、西岡の視点は多くの社会人の視点と被るところがある。例えば、人々は「給料を得て生活するために」働くという一般的な考え方は西岡の考え方と同じだった（P.119 ℓ4）。こうすることで、作者は読者を辞書という異質な世界が一般的な世界の中に存在することを伝え、異質な言葉の世界に興味を持たせている。そして、西岡は馬締と知り合うことで、自分なりに言葉と言うものが何かを理解した。彼は、「有限の時間しか持たない人間が、広く深い言葉の海に力を合わせて漕ぎだしていく。…真理に迫るために、いつまでだってこの舟に乗りつづけていたい」と思っている（P.145 ℓ17）。要するに、西岡にとって言葉とは趣味なのだ。今まで彼は夢中になれるものを何一つもっていなかっただけでなく、夢中になることは格好が悪いと思っていた。しかし、夢中になれる同世代の馬締を見て、西岡は嫉妬した。皮肉にも、彼にとって「言葉」とは初めて夢中になれたものなのである。「真理に迫るために」と言ってはいるが、真理にたどり着くのが重要なのではない。そもそも、その真理というものがあるのかもわからない。でも、辞書編集部の者達がするように西岡も真理というあるかもわからないゴールへ突き進んでいくだろう。なぜなら、言葉がそう彼を狩り立たせるからである。確かに一見、このように言葉という不明瞭なものを追及するのは滑稽に見えるかもしれない。それは、人間がそもそも作った「言葉」というものを理解できないからだ。でも、それは言葉というもので単純に表せない感情や考えが生まれたからだろう。

岸辺みどり

岸辺みどりは西岡正志が異動になってから十年以上経って辞書編集部に異動してきた若い新人である。彼女は「要領よく、ものを所定の場所に収めていけるところ」を利点として、「大渡海」を創り上げるうえで成長していく（P.160 ℓ13）。岸辺は西岡と同様に最初は辞書に全く興味はないが、馬締を嫉妬している訳でもなく、もともとはファッション誌で一生懸命働いていたところから察するに、ある程度の夢中になれる趣味を持っているため、岸辺は西岡のような立ち位置ではない。どち

らかと言うと、彼女は辞書編集部に持ち込まれた新たな風だろう。なぜなら、「愛」という項目に関して、「異性を慕う気持ち」というのはおかしいという新たなアイデアを持ち込んでいるからだ。それは、馬締にも影響を与えた。馬締も一度は「恋愛」と言う項目で「特定の異性に（感じる）特別の愛情」という語釈に疑問を感じたが、日々の作業に追われて大事なことを忘れていた（P.041 ℓ11）。他にも、岸辺は辞書が慎重を期するあまり保守的になるところがあることを指摘している。例えば、「男」や「女」の語釈に性器の違いが指摘されているだけだと、あまりしっくりこないだけでなく、中学生を落ち込ませてしまう。また、「死」の語釈でも、「死ぬこと」とだけ書いてあっても、読者からしてみれば、意味不明である。岸辺はそういうところが辞書の問題であると言っている。彼女自身は最初なぜ自分が女性ファッション雑誌の編集部から辞書編集部に異動させられたか、言葉と言うものとどのように接して良いかも分からず悩んでいた。また、彼女は西岡と違って金を稼ぐために働くという考えではなく、職場の環境や人間関係を重んじているため、年の離れた辞書に熱中する変わり者達と上手にやっていける自信がなかった。しかし、西岡に教えられた馬締が香具矢に送った手紙を読むことで、岸辺は馬締も「若いころは私と同じだった」のだろうと気づき、自分に自信がつく（P.185 ℓ16）。それは、言葉が持つ曖昧な意味合いを明確にすることは岸辺自身にとっても大事なことだと思っているからだ。岸辺は他と違い、辞書を舟ではなく、鏡に例えている。彼女が言うに、辞書は「歪みの少ない鏡」であり、「歪みが少なければ少ないほど、そこに心を映して相手に差しだしたとき、気持ちや考えが深くはっきりと伝わる」と考える（P.186 ℓ5）。こうして、言葉に真剣に向き合えるようになった岸辺は、馬締と対等の立場で言葉について議論できるようになり、馬締にも影響を及ぼした。そうして、彼女は言葉の持つ力を知る。言葉には、「だれかを守り、だれかに伝え、だれかとつながりあうための力」がある（P.203 ℓ7）。だから、それを自覚することは周囲の人の気持ちや考えを注意深く傷つけずに理解できることが可能である。しかし、裏を返せば、言葉には、誰かを傷つけ、誰かに偽りを教え、誰かの繋がりを切れるほどの力があるとも捉えられる。岸辺にとっての言葉とは、気持ちや考えをはっきりと伝えるためのものであるだけでなく、伝え方によっては人にも多大な影響を与えかねない大きな力を持ったものでもある。

荒木と松本

荒木公平は辞書編集部の元ベテラン編集者であり、松本先生のよき相棒であった。松本先生は「大渡海」の監修者であり、いちおう国語学者であったが、大学の教授職を辞めて、辞書に人生を捧げてきた人である。西岡が言うように、馬締を含めて彼らは「辞書に魅入られた人々」であるが、決して辞書を愛している訳ではない（P.119 ℓ7）。なぜなら、「愛するものを、あんなに冷静かつ執拗に、分析し研究しつくすこと」はないからだ（P.119 ℓ11）。西岡によれば、あの辞書に対する熱意は「憎い仇の情報を集めまくるに似た執念」であると言っている（P.119 ℓ12）。なぜ

言葉が憎いかと言うと、それは、彼らにとって言葉とは広くて深い海であり、生き物のように流動するものであり、ろくな形がない不明瞭なものだからだ。要するに、荒木も松本先生も完全に把握が出来ない水のように自由なものに形を与えようとしているのだ。それが、「大渡海」である。では、なぜ松本先生は、「生活するために必要な最小限を残し、あとはすべて辞書に傾注せねばならない」という考えまでに至ったのか（P.047 ℓ18）。それは、言葉が生きた思いを伝えるものだからだ。松本先生が説明するに、海外では自国語の辞書創りに公の金を使うことが多いらしい。なぜなら、言葉である言語とは民族のアイデンティティの一つであり、国家の威信をかけて作られるものだからだ。そう考えると、海外では言葉が生きた思いを伝えるものではなく、権威づけと支配の道具として使われることがあるほどに言葉とは重要なものである。故に、日本の辞書編集部が言葉を重要視している感覚とはまったく異なる。そういう意味で、松本先生は公的機関が作った辞書が皆無の日本で「たとえ資金が乏しくとも、国家ではなく出版社が、私人であるあなたやわたしが、ことこつと辞書を編纂する現状に誇り」を持っている（P.226 ℓ10）。だから、松本先生は飽くまで辞書を、自分の分身であるかのようにそれを中心として生きて来た。それだけ、言葉に魅せられていたのだろう。一方、荒木にとって言葉とは、最初に述べられているように、広くて深い海である。終わりがなく、同じものでも、意味、ニュアンス、使い方がそれぞれ違う言葉たちが世には溢れているという意味で、荒木にとって言葉とは常に海のように解き明かせない「何か」なのだろう。また、荒木も松本先生もこの辞書に対する期待は桁外れに大きく、荒木は、「大渡海」が「多くのひとが、安心して乗れるような…さびしさに打ちひしがれそうな旅の日々にも、心強い相棒になるような舟」になると希望している（P.028 ℓ3）。

結論

これらの登場人物の各々の言葉や辞書に対する想いを見ると、皆自分自身で言葉とは何かという答えにたどり着いている。これは、一人一人にとって「言葉」というものが特別なものになっているからである。登場人物達は皆、言葉に夢中になり、言葉を考え、言葉を知っていった。しかし、それぞれが見つけ出した言葉というものへの答えは異なっていた。なぜなら、それだけ言葉というものは曖昧なものであるからだ。言葉を明確に伝えることが彼ら辞書編集部の目的となっているが、決して彼らが「言葉」という言葉を明確に伝えられることはなくても、彼らは言葉を研究し分析しつくすだろう。それは、辞書を創り終えたときに、証が残るからだ。馬締が「明かり」という言葉が印刷されたときに、「十五年にわたる言葉との格闘は決して無為ではなかった」と感じるように、辞書こそが辞書編集部の努力の結晶であると辞書が教えてくれるからだ（P.250 ℓ4）。故に、その証である完成した辞書を松本先生に見せられなかった馬締や荒木は悔しいのだ。彼らはその後悔を松本先生の遺書を読むことで乗り越えられる。松本先生は、死を直面して辞書が見られずに死を迎えるということを覚悟していたと知り、彼ら自身も前を向いて明日から早

速『大渡海』の改訂作業を始めることにする。これは、後悔を乗り越えた決意を示すだけでなく、「大渡海」という松本先生の想いや覚悟が詰まったものを次世代に引き継いでいくという決意も表されているのだろう。登場人物達は、「言葉」の断片を知る。言葉は、語彙に関係なく想いを伝えられるものであり、時として人を癒したり、傷つけたりして人に多大な影響を与えるものである。また、言葉はときとして無力であるにも関わらず、魅力的である。この作品を通して伝えている言葉の大切さとは、あくまで「言葉」は気持ちや考えを伝える手段の一つであるが、それ以上に言葉は、人と人を結ぶ上で重要となる記憶や思い出を形作るときに必要不可欠であるということだ。人は言葉なしには上手くコミュニケーションを取れない、それゆえ、人々は「言葉」を発展させ、語彙を増やしてきた。しかし、いつしか人間はコミュニケーションをとるときに言葉を省くことが多くなった。近年では、「若者言葉」がはびこっている。でも、それもまた時代の流れなのだろう。世間的に若者言葉は問題にされがちだが、ただ言葉がまた新たな時代に合わせて発展しただけのことだろう。辞書を使う人は確実にデジタル化が進んで少なくなっている。そして、それもまた時代の流れではある。それでも「辞書」はなくならないだろう。辞書とは、言葉の存在理由を証明する上で大事なものであり、それを作り上げる人々の言葉に対する思いは計り知れないほどに真剣であると同時に、気楽のようにも思える。なぜなら、彼らは言葉や辞書を自分たちの知識欲を満たすために日々言葉の大切さを解いている面があるからだ。このように、言葉を欲する人がいる限り、辞書というものは無くならない。常に、言葉というものが私達人間の会話方法で必須であった故に、これからも「言葉」は存在していくだろう。どんなに、外見が変わろうとも人に記憶や想いを伝えるという存在理由は人が話す限り、永遠に続いていく。したがって、本書の様々な登場人物達の言葉に対する考え方や取り組み方を通して「言葉」とは、人間にとって人間であるためのアイデンティティであるということがわかる。本書の登場人物達の言葉に対する考え方や取り組み方は、それぞれ違っていたが、共通していたのは「言葉」というものが大きく人間に関わっていたということであり、それは「言葉」が人間のアイデンティティ、同一性、だということである。

(7483 字)

Bibliography

三浦しをん　『舟を編む』~~株式会社~~　光文社　2011 年 9 月 20 日

新村出編　『広辞苑第二版』株式会社　岩波書店　昭和 44 年 5 月 16 日

A 1
B 1
C 3
D 3
E 3
F 3
G 3
H 2
I 3
J 1
K 3

26